

反知性主義

反知性主義という言葉がはやっているようだ。これを反知性・主義と読んではいけない。正しくは反・知性主義なのだが、ネットや評論などでは、論敵を罵倒するための言葉として反知性主義を使っている人がいる。こういう人は、自分には知性がある論理的で教養があり、対する相手は反知性の不勉強な無知な人間だと言いたいのだろう。バカというと露骨で自分の知性がないように思われるので、自分の評価を落とさずに相手を揶揄するためにこの言葉を使う。しかし、これは、「バーカ、バーカ」と言って、相手を攻撃したつもりになっている子供と全く変わらない。反知性主義は何かを判断するときの考え方というか態度・見識のようなものだから、相手を罵倒するための言葉として反知性主義は使えない。使った瞬間に、その人間は知性がなく教養がないということを暴露することになる。

確かに、反知性主義を、無知による確信、非論理的・盲目的信念の肯定という意味で使っただけなら、この言葉が表している内容はもう少し複雑かもしれない。反知性主義には、無知の純粋さに対する積極的な肯定のようなものが含まれていないわけでもなさそうだからだ。

無知の純粋さに対する積極的な肯定はアメリカ映画によく出てくる。たとえばホレスト・ガンブ（「人生はチョコレートの箱、開けてみるまで中身はわからない。」あるいは、「僕は頭は良くないけど、愛がどんなものかは知っているよ。」）。ガンブは知恵遅れだけれど、だれよりも清らかで誠実（honest）だ。ガンブは様々な挫折を味わいながらひたむきに何かに向かっていく。そして神はガンブに幸運を与える。ガンブは無知で知恵遅れという設定でなければいけないのであり、アメリカ人の中にはそういうガンブを愛する心情がある。

トランプ大統領の支持層は、東部の教養あるエリートではなくて、ブア・ホワイトと呼ばれる没落した中産階級であると考えられている。ニューヨーク・タイムズなどアメリカの主要なマスコミを東部の教養主義・知性主義を代表する言論ととらえられると、大統領選挙におけるクリントンの敗北は、彼らの言論が大衆を納得させなかったことを意味している。共和党の中にも当然、教養主義・知性主義はいるから、泡沫候補であったトランプが共和党の代表になったことも、教養主義・知性主義の敗北である。知性主義の立場からすれば、大衆が知的であれば当然勝つべき自分たちが、2回も続けて負けたのだから、何故、知が無知に負けたのかと考えてしまう。ここまでは、まあ、無理もないともいえる。しかし、ここにはとんでもない独善が潜んでいる。「自分たちは知的であるがゆえに、自分たちは知的だ。」という循環論法・盲目的確信だ。これは極めて「知的」でない。反トランプ・キャンペーンをいまだに行っている芸能人などがいるようだが、彼らは自分が知性主義であり知的であると主張しているのだろうが、愚かなことだ。無知をさらしている。今起きていることが、知

性主義と反知性主義の対立だというとならえ方はそう間違っていないが、反知性主義を知性の否定＝反教養主義ととらえて、知が何故無知に負けるのかというような分析をすると、その分析は失敗する。そこには、知性主義は、当然、反知性主義に勝つべきなのだという傲慢な思い込みがある。せいぜい自己満足的にデモでもするか、暴力に訴えるか効果のない啓蒙やキャンペーンをするか、意味のない行動にしか結び付かない。おそらく、知性主義の傷口はもっと広がる。反知性主義は、知性主義に対する批判だから、知性の限界をとらえていて、その時点では無知な知性主義よりも「知的」だからだ。

アメリカに詳しい人に、クリントン側にはアートがあるが、トランプにはアートがないのはなぜかと質問したら。何故かわからないがそうになっていて、確かにトランプ側には、カントリーミュージックしかないと言っていた。カントリーミュージックを聞こうが、ハンバーグにケチャップをかけて食べようが、それはそれで一つの文化で、アーティスティックな表現でないとは言えない。アートがないわけではないらしい。こういって、アンディー・ウォルフォールを考へるかもしれないが、そうではなくて、この場合、アンドリュー・ワイエスのアメリカンリアリズムというか、素朴主義をイメージした方がよい。彼らなりの美意識のようなものがあるのだ。逆差別に対する反発・経済的な配分に対する不満だけが、トランプ現象を生み出しているのだと考へることは危うい。その根底にある彼らなりの知や正義を考へてみるべきだ。

アメリカという国が、何故、大統領制でアメリカ合衆国なのかという説明は学校では習わなかった（合衆国になった歴史的背景の説明は聞いた。）。ところで、United State を合衆国と訳すのは誤訳ではないか。正しい訳は合衆国ではなくて合州国ではないか。考へたいのは合州国である理由である。つまり、対外的には一つの国であり一致して行動するが、国内的な行政・司法・立法において州の独立性を認めるという制度である。州単位で高度なレベルで自治を認める。連邦最高裁判所の機能は、州法と別の州法の違いから判断に矛盾が生じた場合にどのように判断すべきかを連邦の立場で決めたり、州法が合衆国憲法に矛盾していないかを判断することにある。建前上は、合衆国憲法と特に矛盾しないかぎり、何を法的正義とするかは州にゆだねられている。おそらく、これは、もっと小さな単位（例えば村の様なコミュニティー）での自治の肯定と結びついていて、連邦政府に自分たちの価値観や生き方に介入してもらいたくないという信条を背景にしている。当時の人は、その方がよいと考へそうしたいと思ったのだろう。

初期のアメリカは宗教国家だからこれには宗教的な背景がありそうだ。アメリカはヨーロッパにおける宗教的権威から逃れてきた人々によって建国された（建前上そうになっていることも含める。）。しかし、実際には、初期のアメリカにも宗教的エリート、指導者層はいて、彼らが世論をリードした。宗教的な権威主義から逃れてきた多くの大衆にとっては、

彼らエリートもまた、ヨーロッパにおける権威と大して変わらない。西部劇（例えば「大草原の小さな家」）を見ていると町や村の牧師さんが出てくる。彼らには東部の知的エリートという雰囲気はない。そういう者とは異質のものとして描かれている。牧師さんを中心に人々が集まり、様々なことで村に意見を集約していたみたいだ。まあ、一昔前の日本で、村長さんと、寺の坊主と、小学校の校長先生、それに付け加えれば駐在さんが、村の顔役だったというのと似ているかもしれない。良くも悪くも皆で協力してインディアンから土地を奪って、屁理屈をこねてこれを守らなければならなかったのだから大変だ。こういう場面では、人々の一体感や個々の人間の誠実さの方がエリートの教養よりも大切だっただろう。これもアメリカ的正義の一つだ。

利害調整して論理を統一して、対外的には（独立戦争時代においては対欧州）一つの国として行動する。国内的には、地方自治的な権利を守るという矛盾しかねない 2 つの理想の妥協点として、「合州国」という妥協的な制度を考えたのだろう。この制度を、宗教的権威の問題と重ね合わせてみる。キリスト教と関係のない一般のわれわれ日本人としては、カトリックであろうがプロテスタントであろうが教皇からその辺の牧師や信者まで含めて、彼らは因習邪教にとらわれた馬鹿野郎どもに過ぎないが、彼らの内部にそれなりに内的整合性をもった論理がないわけではない。ネッシーだって、雪男だって、その存在を前提として、様々な現象を整合的に説明できないわけではないから、因習邪教だって、内的整合性をもった世界を構築することはできる。しかし、これは結構大変で、かなりのエネルギーと知的能力を必要とする。この内的整合性を高め維持していくのは知的エリートの仕事だ。普通の人にはそんな無駄なことに時間を使いたくない。内的整合性の維持は外部からの攻撃に対する防御だと考えられているが、そうではない。私は、因習邪教の中で内的に整合性があるがなかろうが一向に気にかからない。「なんであろうが、信じることはお前の勝手だ。」の一言でおしまいだ。内的整合性が必要なのは異端者を作らないためだ。だが、内的整合性などは作ろうと思えばどのようにでも作れるから、結局、異端者が生まれて宗教戦争となる。この説明だと、異なる宗教間では宗教戦争は起こらないことになり、ムスリムとキリスト教の間の宗教戦争はどうなんだと言われそう。あれは、そもそもユダヤ教とキリスト教とムスリム教が、ともに「神は一つだ」教の分派だからだ。自然数としての 1 はめんどくさい。それ以上、分けることができない。分けた瞬間に元のものでなくなる。

大衆にしてみればそうした宗教的権威に振り回されるのはたまらない。アメリカに逃げたくなるのはわかる。とはいっても、彼らは依然としてキリスト者だ。逃げたところで、一神教の宿命として逃げた先にも宗教的権威はできる。キリスト者でありながら、権威の束縛から逃れるには、信仰心の強さだけに価値を置く素朴主義にならざるを得ないだろう。州の自治を含めて、自らの生き方を自ら決める自治主義は、こういう宗教的な主張に根差している。アメリカ的民主主義の根底にはこれがあるだろう。

自治主義・民主主義というと正義のような気がするかもしれないが、これが結構危ない。私たちは、南北戦争を奴隷解放のための戦争のように教えられたが、実はちょっと違う。奴隷解放のための戦争というのは勝者となった北軍の歴史感だ。敗者である南軍の戦争目的にだって大義はあるはずだ。納得できる大義がなければ、一般庶民を巻き込んだ長期の戦争はできない。しかし、それはある種の情緒のようなものだから、現代人でしかもアメリカ人でない私にわかるはずがない。想像にたよるしかない。通常、語られる南北戦争の対立軸は、奴隷制対奴隷解放、自由貿易対保護貿易なのだが、貿易などの問題が国民が長期の戦争に耐える大義とはならないだろう。奴隷解放については、リンカーンが奴隷解放宣言をするのは、南北戦争の後半であり、戦争の初期には奴隷解放宣言をしていない。南北戦争後にも長く人種差別は続いた。奴隷解放は、欧州の国々に、奴隷制をかかげる南軍に対する支援をためらわせる大きな要因となったから、戦略的には有効だったが、初期における北軍の主要な戦争目的ではないと思う。そもそも、南部 11 州はアメリカ連合国として合衆国から独立したのである。これに対して、北軍は彼らを引き戻そうとした。つまり、放っておいてくれと言っている者と放ってはおけない者の戦争である。南軍には、奴隷解放を含めて北部の理念に従いたくない、建国の理念である州の独立・南部の生き方を守りたいという大義があったのではないか。実際、南軍は各州の独立性を保とうとしたので、なかなか統一行動がとれなかった。数的劣位にあるものが、一体的な作戦行動がとれないのだから、いくらリー将軍が優れた指揮官でも戦争に勝つはずがない。それでも州の独立は大義だ。

政党の主張は時代とともに変わり、現在では、LGBT も含めて、民主党の方が性差別や人種差別・民族差別に敏感で、どちらかといえば国際派、共和党の方が差別に寛容で、内向き志向で孤立主義的だが、もともと民主党の母体は南部で共和党の母体は北部だ。南北戦争の時点では、民主党の方が奴隷制肯定で州の独立を主張していた。民主党が反差別になったのは、公民権運動のときに差別主義者が民主党を去ったからだ。権威主義的な押し付けに対する反発という意味での反知性主義は、本来、民主党のものだ。そして、アメリカ的正義でもある。実際、アフーマティブアクションのような、微妙に意見の分かれる政策について、一方的な押し付けを行えば、反知性主義による反撃を受けるだろう。

意外に思われるかもしれないが、自然科学者には反知性主義的見識を持っている人が少なくない。むしろ、優秀でチャレンジングな研究者は反知性主義的の一面を持っている。既往の理論や過去の事例だけをなぞっていても、新しい発見や理論はなかなか生まれない。理論では説明できない事例、従来の経験の範囲を飛び越えた事例にめぐりあって、何か新しい理論を構築したいという思いがある。従来の理論や知識にこだわらず、新しい事例に巡り合っていて、新しい世界を作るチャンスを求める。そのようなチャンスは、確率的なものだから、教養主義的な勉強を最小化して、できるだけたくさんやってみようとする。反知性主義は、創造や社会を変えるエネルギーの一つだ。

知性主義が反知性主義を批判するためには、反・反知性主義にならなくてはならないのだが、そんなに大真面目に、知性主義と反知性主義を対立的にとらえる必要はない。見識とか態度にすぎないのだから、適当に使い分ければよい。上手に使い分けられるということが重要だ。偉そうに、反知性主義はけしからんなどと言っているようではだめだ。